

論 文

シスモンディ研究序説

—シスモンディの生涯と彼の遺産(中)—

小 池 澂

- I. はじめに
- II. 18世紀末～19世紀前半のヨーロッパに生きたシスモンディ
- III. シスモンディ自身によっては公にされなかった彼の作品
(以上, 本誌第42巻第6号)
- IV. シスモンディ自身が公にした主要な作品
 - (i) 歴史関係の作品
 - (ii) 経済関係の作品 (以上, 本号)
 - (iii) 文学関係の作品
 - (iv) 宗教関係の作品
 - (v) 法律関係の作品
 - (vi) 政治関係の作品
 - (vii) 時論的な小品
- V. シスモンディが受けとって後世に伝えた文書類
- VI. 結び

IV. シスモンディ自身が公にした主要な作品

シスモンディの著作活動は、彼が1800年10月に亡命先のイタリアから故郷のジュネーヴに舞い戻ったのを機縁にいよいよ本格的なものとなった。彼は、1800年の10月か11月の頃に『トスカーナ農業概観』の刊行のための交渉を始め、それから1842年6月8日に『フランス人の歴史』第29巻の校正を行うまでの41年余りの間、実に精力的な著作活動を展開した。そしてその結果として多数の著書やパンフレットや論文等を公にした。それらの作品は、どのような分野に関連する事柄の叙述に比重を置いたものかという観点から幾つかのグループに大別することができるかもしれない。本節においては、それぞれのグループに属

する主要な作品のみをとりあげて紹介してゆくことにする。

(i) 歴史関係の作品

まず第一に、シスモンディは歴史関係のものを著した。その中には浩瀚な著作が2点も含まれている。1点は、彼が1807年から1818年にかけて出版した『中世イタリアの諸共和国の歴史』全16巻である¹⁾。この著作は、彼の歴史家としてのデビュー作であった。イタリアを対象とするその歴史書のドイツ語翻訳版がフランス語原典版と同じく1807年にスイスのチューリッヒで刊行され始めた²⁾ことから、「歴史家シスモンディ」は、ジュネーヴないしはレマン県といった狭い地域にではなくしてヨーロッパのフランス語圏全域とドイツ語圏とに、さらにある程度まではイタリア語圏にも、文字どおり同時にデビューすることになった。そして最初の成功を、ジュネーヴを中心とするレマン県とスイスとドイツにおいてものにした³⁾。レマン県やスイスはともかくとしてもドイツでの成功がレマン県以外のフランス、とりわけパリでのそれに先行したのは、恐らくつぎのような理由によるのであろう。すなわち、シスモンディの当該著作はドイツの歴史家ミュラー (Johannes von Müller) の主著『スイス連邦史』から想を得たものであった⁴⁾。ミュラーの主著はシラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller) やヘルダー (Johann Gottfried von Herder) らの作品とともに、ドイツの広範な読者に中世趣味を植えつけていた⁵⁾。シスモンディの

-
- 1) J. C. L. Simonde Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du moyen âge*, Zürich: Henri Gessner, t. I et II: 1807, t. III et IV: 1808. この著作の第5巻以降の諸巻の出版地・出版者・出版年については、後注 9, 11を参照されたい。
- 2) *Idem, Geschichte der italienischen Freistaaten im Mittelalter*, Zürich: Heinrich Geßner, T. I u. II: 1807, T. III u. IV: 1808, T. V u. VI: 1810, T. VII u. VIII: 1811, T. IX: 1819, T. X-XII: 1820, T. XIII: 1821, T. XIV: 1822, T. XV: 1823, T. XVI: 1824.
- 3) Cf. Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Paris, 1932, p. 49.
- 4) Cf. *ibid.*, pp. 96, 104, et 354-55.
- 5) Cf. *ibid.*, p. 90.

中世イタリア史書が現われたときには、彼と深交のあったミュラーは、友人のその歴史家としてのデビュー作にドイツの知識人たちの注意を促そうと努めもした⁶⁾。と同時に他方のパリにおいては、つとにスタール夫人をはじめとする反ナポレオンの、あるいはコスモポリタンな知識人が追放その他の迫害を受けており、1807年当時はナポレオンの独裁やフランスのナショナリズムに迎合しないしは拍車をかけるような傾向が論壇の主流をなしていた⁷⁾。しかも問題のイタリア史書の著者は、当時のヨーロッパの人々にしてみれば、スタール夫人の側近の自由主義的なジュネーヴ人、あるいは少なくともその史書のタイトル・ページに表記されているように、対仏同盟への加盟国ロシアの「ヴィルナ帝国大学の通信教員」であった⁸⁾、と。このようなわけで、「歴史家シスモンディ」のパリでの成功がドイツでのそのあとに続く形となったのであろう。

だがそれでもトスカーナのフランス領への併合の翌年、つまり1809年には、同じイタリア史書のフランス語原典版が、タイトル・ページの著者紹介の欄にフランス領内の各地の研究・教育機関名をも盛り込んで、チューリッヒではなしに今度はパリを出版地として改めて第1巻から刊行しなおされた⁹⁾のをきっかけに、同書あるいはその著者にたいするパリでの評価は急速に高まった。そして早くも1810年のフランス学士院旬年賞授与の際には、「歴史家シスモンディ」に選外優良賞が与えられるまでに至った。さらに、ナポレオンのモスクワからの撤退の直後（1813年1月～6月）に初めてシスモンディがパリを訪れたと

6) Cf. *ibid.*, p. 357.

7) Cf. *ibid.*, pp. 59-60.

8) 前注1に掲げたシスモンディの当該著作のタイトル・ページには、著者の肩書がつぎのように表記されている。すなわち、'M. C. de l'Université Impériale de Wilna, et de quelques Académies, etc.'と。このうちの冒頭の'M. C.'を、筆者は'Membre Correspondant'の省略形であろうと解釈した。

9) J. C. L. Simonde Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du moyen âge*, Paris: H. Nicolle, t. I-VIII: 1809. なお、この著作の出版者がチューリッヒのゲスナーからパリのニコルに変更された事情については、つぎの文献を参照されたい。Salis, *op. cit.*, pp. 89-90.

きには、その地のいわば在野の学者・知識人や文化人たちでさえもが、彼をいっばしの歴史家として遇するようになっていた¹⁰⁾。こうしたことを背景に、パリでは、彼の当面の著作の最初の8巻を発行したところでついに倒産に追い込まれてしまったニコル社のあとを受けて別の出版社が、同じ8巻の第2版と残りの8巻の初版との発行に従事することになった。それらの16巻の発行は、ナポレオンの百日天下が終わって王政が復古したばかりの1815年7月と1817～18年に実現された¹¹⁾。つまり、1807年にチューリッヒで開始されたシスモンディの『中世イタリアの諸共和国の歴史』フランス語原典版の刊行がようやくパリで終結したのは、1818年のことであつたわけなのである。

その間にはまた、同じ著作のイタリア語翻訳版の刊行が始まりもした。ほかならぬイタリアの歴史をとり扱ったこの著作は、早くから、スイスやドイツやフランスに隣接するイタリア北部の学者・知識人の耳目をひいていた。その彼らの間での高い評価が、同書のイタリア語翻訳版の刊行を促したのであろう。それは1810年代に開始され、1817年の末に同書の何巻かがローマで排斥されたあとにおいても敢然と続行されて、1819年の第12～16巻の配本をもって終了し

10) Cf. Salis, *ibid.*, pp. 208-14.

11) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du moyen âge*, Paris: Treuttel et Würtz, t. IX-XI: 1815, t. XII-XVI et la seconde édition parisienne des t. I-VIII: 1818. ただし、この著作の第12～16巻のうちの3巻は、シスモンディ自身のつぎの手紙によれば、実際には1817年の12月に刊行されたということである。Lettre de Sismondi à M^{me} d'Albany, Paris, 30 décembre 1817; Lettre de Sismondi à M^{me} d'Albany, Paris, 8 mars 1818, respectivement dans les *Lettres inédites de J. C. L. de Sismondi, de M. de Bonstetten, de Madame de Staël et de Madame de Souza à Madame la Comtesse d'Albany*, publiées par Saint-René Taillandier, Paris, 1863, pp. 315-16; p. 317. この2通の手紙のうちの後者のみを頼りに、サリスは、「1817年12月22日に『[中世] イタリアの諸共和国の歴史』の第12巻から第16巻までがパリで出版された」と述べている (Salis, *op. cit.*, p. 332. ただし、[] 内は引用者——以下同様)。それにたいして本稿では、シスモンディの前者の手紙にも依拠して、当該著作の「最後の5巻」のうちの「3巻」は1817年「12月」に、そして残りの「2巻」は1818年「1月」に、それぞれ刊行されたとみなすことにする。

た¹²⁾。

これより数年前にはさらにイギリスにおいても、『中世イタリアの諸共和国の歴史』の著者シスモンディは、当代きっての歴史家であるとみなされていた¹³⁾。だからこそ彼は、1814年に、『ジュネーヴにかんする考察……、続いて、ジュネーヴで行われた歴史哲学にかんする講演』という長い標題のパンフレットを、ロンドンの発行所から公にすることができたのであろう¹⁴⁾。このパンフ

- 12) 『中世イタリアの諸共和国の歴史』全16巻のイタリア語初訳版は、サリスによれば、1810～20年にミラノで刊行されたティッコツィ (Ticcozzi) 訳の *Storia delle repubbliche italiane nel medioevo* であるということである (Jean-R. de Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits, suivis d'une liste des sources et d'une bibliographie*, Paris, 1932, p. 66)。だが、それについては筆者未見である。筆者が閲覧しえたイタリア語翻訳版の中でもっとも早い日付を有するものは、つぎの文献である。J. C. L. Simondo Sismondi, *Storia delle repubbliche italiane dei secoli di mezzo*, Italia [Milano]: [Giusti], t. I-V: 1817, t. VI-XI: 1818, t. XII-XVI: 1819。

また、同書の何巻かがローマで排斥されたことについては、上注に掲げた1818年3月8日付のアルバニ伯爵夫人宛の手紙の中で、シスモンディ自身がつぎのように述べている。すなわち、「最後の諸巻がパリで出版されたまさにその日に、つまり [1817年] 12月22日に、ローマ教皇は最初の諸巻を排斥した」と。ちなみに、イタリアの研究者ルベルティスによれば、「1817年12月22日付の聖省の通達によって発禁扱いにされた」のは「とりわけ第11巻」であったようであるということである (A. de Rubertis, *La censura delle opere del Sismondi in Toscana, negli Studi su G. C. L. Sismondi, raccolti per il primo centenario della sua morte (1942)*, Roma e Bellinzona, [1945], p. 386) が、この推測は、少なくとも当該巻の刊行年に照らしてみれば、いささか不自然であるように思われる。

- 13) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 234.
- 14) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Considérations sur Genève, dans ses rapports avec l'Angleterre et les états protestants, suivies d'un discours prononcé à Genève, sur la philosophie de l'histoire*, Londres: John Murray, 1814. このパンフレットがわざわざロンドンの発行所から刊行されることになったのは、つぎのような理由による。すなわち、シスモンディは1814年6月20日にジュネーヴのサン・ピエール大聖堂で叙任式記念講演を行った。その中で彼は、歴史における個人の役割、ことに人類の発展にたいする道徳的・知的諸力の役割、わけてもヨーロッパ文明の発展にたいするプロテスタンティズムの役割を強調した。恐らくそのためであろう。彼が自

レットはシスモンディがイギリスの発行所から公刊した最初の労作であったのであるが、それは、同国の学者や知識人や政治家や宗教家らを失望させるような内容のものでは決してなかった。のちに彼は、ロンドンで刊行されつつあった『キャビネットウ・サイクロピーディア』という叢書の監修者ラードゥナー博士(Dionysius Lardner)から、シスモンディ自身の歴史家としてのデビュー作のダイジェスト版をその叢書の1冊として刊行して欲しい旨の要請ないしは依頼を受けることになった。それに応えてシスモンディが実際に作成したのは、少なくとも彼自身の言によれば、単なるダイジェスト版ではなくして「全く新たな」イタリア史書のための若干内容の相異なる二組の原稿であった¹⁵⁾。それらのうちの英語で書かれたものが、ラードゥナー博士を介して1832年に『イタリアの諸共和国の歴史——イタリアの自由の起源・進展・衰退についての概観』という標題のもとに公刊されたのである¹⁶⁾。この著作は、副題の部分的変

らの講演用の原稿を活字にして流布させようとした際には、正統主義的・反自由主義的なオーストリアの軍隊のスイスへの侵入とスイス諸県での反革命とのおかげでやっと独立を回復しえたジュネーヴ共和国の暫定政府から横槍が入った。だから彼は、ジュネーヴでの出版を断念し、ジュネーヴの一市民として国際政治の舞台でのイギリスの役割に期待をかけるといった内容のもう1つ別のタイトルを有する短い原稿といわば抱きあわせにしてロンドンの発行所から公刊することになったのである(Cf. *ibid.*; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, pp. 225-36), と。

- 15) Cf. J. C. L. de Sismondi, Author's Preface to *A History of the Italian Republics, Being a View of the Origin, Progress and Fall of Italian Freedom*, in *The Cabinet Cyclopaedia* conducted by Dionysius Lardner, London: Longman, Rees, Orme, Brown, & Green, and John Taylor, 1832, pp. [v]-vi; J. C. L. Simonde de Sismondi, Préface à *l'Histoire de la renaissance de la liberté en Italie, de ses progrès, de sa décadence et de sa chute*, Paris: Treuttel et Würtz, 1832, t. I, pp. [i]-iii.
- 16) 上注の前半に掲げたこの英語による著作は、同じ注の後半に掲げたフランス語による2巻本の著作の翻訳版としてとり扱われるのが通例である。このようなとり扱い方に先例を開いたのは、恐らくつぎの文献であろう。Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, pp. 65-6. だがしかし、前者の著作と後者の著作との間には内容上若干の差異がある。シスモンディは、英語で手紙や草稿や論文を書くこともあったのであるから、問題の英語による著作についても、これを翻訳版としてではな

更を伴ってアメリカの発行所からも同時に刊行された¹⁷⁾。

「歴史家シスモンディ」の名声は、英語圏にはとどまらずにさらにスペイン語圏にまで広まっていった。いつの頃からそうなったのかはつまびらかでない。だが恐らくはその地域での彼の名声の高まりを背景にして、上掲の彼の英語によるイタリア史書のスペイン語翻訳版が、1837年にパリの出版社から2巻本として公にされることとなったのであろう¹⁸⁾。ちなみに、このパリで刊行されたスペイン語翻訳版のいわば母体となった1832年ロンドン刊のジュネーヴ人によるイタリア史書からは、そのドイツ語翻訳版も生みだされている¹⁹⁾。さらにまた、これらの翻訳版の底本自体にも、すでに暗示しておいたように、姉妹編があったのである。それは、1832年という同じ年にパリの出版社からだされた『イタリアにおける自由の再生・進展・衰退・没落の歴史』のことである²⁰⁾。こちらのほうは、イタリア語に翻訳されている²¹⁾。

これまでに見てきたように、シスモンディは、『中世イタリアの諸共和国の歴史』の刊行を機縁に歴史家として少なくともヨーロッパ的な規模において名声を博するようになった。そしてその名声を一段と高め、かつ不動のものにしたのが、もう1点の大部の著作『フランス人の歴史』全29巻であったのであ

しにオリジナルな版としてとり扱ってよいのではなかろうかと思われる。たとえ著者が、イギリス出身の夫人の手を借りることがあったとしてもである。

- 17) J. C. L. de Sismondi, *A History of the Italian Republics: Being a View of the Rise, Progress, and Fall of Italian Freedom*, Philadelphia: Carey & Lea, 1832.
- 18) *Idem, Historia de las republicas de Italia, o del origen, progresos y ruina de la libertad italiana*, traducida por Francisco Facio, Paris: Libreria de Rosa, 1837, 2 tomos.
- 19) J. C. L. Simonde v. Sismondi [sic], *Geschichte der italienischen Freistaaten, Ihr Ursprung, Fortschritt und Fall*, übersetzt von Friedrich Wilhelm Bruckbräu, Augsburg: Denisch und Stage, 1840.
- 20) 前注15, 16を参照されたい。
- 21) I. C. L. Simondo de Sismondi [sic], *Storia del risorgimento, de' progressi, del decadimento e della rovina della libertà in Italia*, Lugano: G. Ruggia e C., 1833, 2 vol.

る²²⁾。この著作は、歴史家としてのシスモンディの畢生の仕事であった。彼は、先の大著を完結させて半年と経たない1818年5月に早くも次の大作のためにペンをとり、約3年後の1821年4月にはその第1～3巻の公刊にまでこぎつけた。当初の彼の計画では、20年の間に1789年の三部会召集に至るまでの14世紀余りのフランス史を叙述し、逐次刊行することになっていた。だが、その間には年を感ずるようになり、わけても病に冒されたことが決定的な契機となって、彼は、やむなく当初の計画をその完遂の一步手前の段階において変更せざるをえなくなった。すなわち、1774年のルイ15世の崩御のところでフランス史の叙述に終止符を打ち、そのすぐあとに「私の結論」を述べて全巻の終わりとするのを余儀なくされたのである。「歴史家シスモンディ」は、みずからの死の1カ月余り前の1842年5月9日にペンを置いた²³⁾。そのペンによってものされた当面の大作の第27～29巻が刊行されたのは、同じ1842年ではあっても著者の死後のことであつたに違いない。ちなみに、「ルイ16世の即位から1789年の三部会の召集まで」のフランス史を叙述する仕事は、やがてアメデ・ルネ(Amédee Renée)によって引き継がれ、1844年にシスモンディ著『フランス人の歴史』の第30巻として実現された²⁴⁾。また、その第31巻として同年に刊行された「アルファベット順の総合索引」も同じように、シスモンディの名を冠しているとはいえ実際には彼自身の手になるものではなかつた²⁵⁾。

22) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, Paris: Treuttel et Würtz, t. I-III: 1821, t. IV-VI: 1823, t. VII-IX: 1826, t. X-XII: 1828, t. XIII-XV: 1831, t. XVI et XVII: 1833, t. XVIII: 1834, t. XIX et XX: 1835, t. XXI: 1836, t. XXII: 1839, t. XXIII et XXIV: 1840, t. XXV et XXVI: 1841, t. XXVII-XXIX: 1842.

23) Cf. Sismondi, *Ma conclusion* [de l'*Histoire des Français*], *ibid.*, t. XXIX, pp. [509]-516; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 431.

24) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, continuée depuis l'avènement de Louis XVI jusqu'à la convocation des États-généraux de 1789 [sic], par Amédée Renée, t. XXX, Paris: Treuttel et Würtz, 1844. Cf. Note des éditeurs, *ibid.*, t. XXIX, pp. [517]-[518]; Amédée Renée, [Avant-propos al t. XXX de l'*Histoire des Français*], *ibid.*, t. XXX, pp. [i]-[ii].

25) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des Français*, t. XXXI: Table générale

シスモンディがみずからのペンによって書き綴った2点目の浩瀚な歴史書は、それがフランス人を対象としたものであり、また最初から最後まで一貫してパリを出版地としていたということもあって、他のどこよりもまずパリを中心とするフランスで好評を博した。そのフランスにおいては、すでに王政復古を契機に人々の知的生活の中での歴史研究の比重が著しく高まっていた²⁶⁾。恐らくはそのような事情も加わって、最初の数巻は刊行と同時に熱狂をもって迎えられた²⁷⁾。だが、やがて1830年の7月革命によって復古王政が打倒されると、歴史研究ブームのほうも急速に下火になった。それでもなお相変わらず屹々と続巻をだし続けた自由主義的フランス史家シスモンディは、1833年に当該フランスの人文・社会科学アカデミーの外国人会員に指名され、さらに1841年にはレジオン・ドヌール勲章騎士章の受勲者に選ばれさえた²⁸⁾。とすればそれは、フランスのナシオンにたいする、とりわけその歴史の研究にたいする彼の貢献が並々ならぬものであったからに相違ない²⁹⁾。生前のシスモンディの活躍ぶりを臨場感あふれる筆致で描いてくれた彼と同時代の著述家の中には、「彼は……フランスの歴史学の現代的学派のまさに創始者なのである」³⁰⁾とまで評する向きもあった。

いま引用した一文は、実はイギリス人によって書かれたものであった。このことからもうかがえるように、1821年にパリで刊行され始めたシスモンディの

alphabétique, Paris: Treuttel et Würtz, 1844. Cf. Avis des éditeurs, *ibid.*, t. XXX, le verso du faux titre.

26) Cf. Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 437.

27) Cf. *ibid.*, p. 375.

28) Cf. *ibid.*, p. 438.

29) 『フランス人の歴史』の著者が19世紀前半のフランスにおける歴史研究の発展に及ぼした影響力については、つぎの文献を参照。Jean-R. de Salis, Préface à la nouvelle édition, dans son *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, (1932), réimpression, Genève, 1973, t. I, p. 3.

30) [Francis Palgrave,] Life and Works of Sismondi, *The Quarterly Review*, vol. LXXII, no. CXLIV, September 1843, p. 300.

件の歴史書に高い評価を与えたのは、ただたんにフランスの人たちばかりではなかった。彼らの間でのそうした評価は、じきにヨーロッパの他の地域の人々によっても共有されることになったのである。とくにドイツとイタリアとイギリスにおいては、そのことを背景として早くも1820年代のうちに同書の翻訳版の刊行が開始されさえした³¹⁾。そしてそれを機縁に、シスモンディのフランス史書はますます広範な人々の間で好評を博するようになったのでもある。

(ii) 経済関係の作品

以上のように、シスモンディは、生前からすでに歴史家としてヨーロッパ的な規模での名声を確立していた。だがしかし、彼の名を耳にして即座に歴史家を連想する向きがあったとしたら、そしてそのことをシスモンディ自身が知っ

31) まず、『フランス人の歴史』のドイツ語翻訳版は、J. C. L. Sismonde de Sismondi [sic], *Geschichte der Franzosen*, mit Anmerkungen von Heinrich Luden, Jena: Bran, Bd. 1: 1822 である。ただし、これの続巻は刊行されなかったのではなかろうかと思われる。*Gesamtverzeichnis des deutschsprachigen Schrifttums (GV) 1700-1910*, bearbeitet unter der Leitung von Hilmar Schmuck und Willi Gorzny, München, New York, London und Paris, 1985, Bd. 135, S. 166 によれば、同じ1820年代にはそれとは別に抄訳版 (*Die kreuzzüge gegen die Albigenser im 13. Jahrhundert*, mit e. Einleit. v. G. W. Becker, Leipzig, 1829) がでていようである。だが、その版については筆者未見。つぎに、同書のイタリア語翻訳版は、J. C. L. Simondo de' Sismondi, *Storia dei Francesi*, recata dal Luigi Rossi, Milano: Nicolò Bettoni, vol. 1-3: 1822 である。フィレンツェの国立中央図書館所蔵のつぎの文献に掲載されている出版社の広告によれば、この翻訳版の第6巻までは Nicolò Bettoni から、また第15巻までは Capolago の Tipografia Elvetica からそれぞれ刊行され、目下のところ第16巻の印刷が進行中であるということであるが、第4巻以降の諸巻については筆者未見である。G. C. L. Simondo de' Sismondi [sic], Prefazione premessa dall'autore al secondo volume di questi *Studi intorno alle scienze sociali*, Primo degli *Studi intorno all'economia politica* in cui espone tutta la vastità del suo assunto e il pieno suo intendimento, [Capolago: Tipografia e Libreria Elvetica, 1839], p. 5. 最後に、1820年代に刊行された英語翻訳版としてはつぎのものがある。J. C. L. Simonde de Sismondi, *History of the Crusades Against the Albigenses, in the Thirteenth Century*, London: Wightman and Cramp, 1826.

たとしたなら、恐らく彼は満足するどころかかえって長嘆しさえしたに違いない。というのも、上掲の『フランス人の歴史』全29巻を締めくくる「私の結論」の中で、彼はつぎのように述べているからである。すなわち、「私の人生〔をふり返ってみると、それ〕は経済の研究〔の側面〕と歴史の研究〔の側面〕とに分けられる。だからこの長い叙述においても、〔私の〕歴史家〔としての側面〕と並んで〔もう1つの〕経済学者〔としての側面〕がしばしば姿を現わさざるをえないのである」³²⁾、と。また、彼が公にした著作の中には、彼自身の経済学者としての側面のほうがいわば主役を演じているように見えるものもあるからでもある。つまり、シスモンディは、歴史関係のものと並んで第二に、経済にかんする労作をも著したのである。

しかも公刊の順序からいえば経済にかんする労作のほうが先であったのであって、それに続いて歴史にかんするものと経済にかんするものとが交互に、またときには同時に公にされたのであった。シスモンディの生涯におけるデビュー作は、前述の1801年刊の『トスカーナ農業概観』であった³³⁾。出版地ジュネーブをはじめとするフランス・レマン県でのこの著作の評判は、やがてドイツ語圏にも伝わって行って、1805年にはそのドイツ語翻訳版が刊行されることになった³⁴⁾。だがしかし、その著作を歴史書として受けとった読者は恐らく皆

32) Sismondi, *Histoire des Français*, t. XXIX, p. 515. 本文中に引用した一節の前半部分は、サリスのシスモンディ伝の中にも引用されている (Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. [63])。ただしそれは、彼自身の注記によれば、つぎの文献からの孫引きである。Virgile Rossel, *Histoire littéraire de la Suisse Romande, Genève et Paris*, 1891, t. II, p. 393. 彼は別の箇所においては、本注の冒頭に掲げた文献の516ページから直接引用している (Salis, *op. cit.*, p. 438) のに、その前のページに、すなわち515ページにみられる一文をなぜ孫引きしたのであろうか。理解に苦しむところである。

33) J. C. L. Simonde [de Sismondi], *Tableau de l'agriculture toscane*, Genève: J. J. Paschoud, 1801. この著作については、本稿(上)、関西大学『経済論集』第42巻第6号、1993年3月、221ページをも参照されたい。

34) *Idem, Gemählde der toskanischen Landwirthschaft [sic]*, übersezt und mit Anmerkungen und Zusätzen begleitet von Johann Burger [sic], Tübingen: J. G. Cotta, 1805.

無であったに相違ない。と同時に、すべての読者が経済書として受けとったというわけでもなさそうである³⁵⁾。それを経済書として受けとるべきかどうかは、経済についての捉え方もかかわって議論の分かれるところである。むしろ、いまの問題をめぐっては否定的な見方をする向きが少なくないといったほうがよいかもしい³⁶⁾。たとえば、前世紀末から今世紀前半にかけて活躍したフランスの経済学者アフタリオン(Albert Aftalion)は、この著作を「経済にかんする研究書というよりもむしろ農学についての研究書」とみなしている。とはいえ彼の場合には、その書の中に、のちのシスモンディの代表的な経済書につながる考え方が含まれていることを認めるに吝かではなかった³⁷⁾。シスモンディの後年の経済書との関連においてばかりでなくさらに、アフタリオンにとっては利用不可能であったと思われる前述した先年の経済論稿³⁸⁾との関連においても当面の著作を再検討してみるならば、その経済書としての側面はいっそう大きな広がりや重みを有するものとして認められるかもしれない。そうなったらまた、シスモンディの独自の経済観ないしは経済思想とされてき

35) シスモンディと同じ時代の批評家たちによる『トスカーナ農業概観』の性格づけについては、さしあたりつぎの文献を参照されたい。Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 64. ちなみに、シスモンディ自身は当面の著作を、少なくとも「経済学書」とはみなしていなかった(Cf. *Political Economy, and the Philosophy of Government: A Series of Essays Selected from the Works of M. de Sismondi*, London: John Chapman, 1847; *Political Economy and the Philosophy of Government: Selections from the Writings of J. C. L. Simonde de Sismondi*, New York: Augustus M. Kelley, 1966, p. [457]). それが「経済学書」とはいいがたいものであるという点においては、衆目の一致するところであろう。

36) 『トスカーナ農業概観』を経済書としてとり扱っている文献に、つぎのものがある。Alph. Courtois, *Notice sur la vie et les travaux économiques de Sismondi*, extrait du compte rendu de l'Académie des Sciences morales et politiques, Paris, 1893, p. 7. しかし、この種の文献はどちらかといえば少数部類に属するように見受けられる。

37) Albert Aftalion, *L'œuvre économique de Simonde de Sismondi*, (1899), New York, 1970, pp. 19-20.

38) この論稿については、本稿(上)、219-21ページを参照されたい。

たものにもなんらかの修正を加える必要が生じてくることであろう。

シスモンディは、『トスカーナ農業概観』の刊行から数えて2年後の1803年には、ジュネーヴの同じ発行所から『商業的富について』全2巻を公刊した³⁹⁾。その間にはなんらの労作をも公にしていなかった。したがって『商業的富について』は、彼が世に問うた2番目の労作であったということになる。それは、れっきとした経済書であった。この点は衆目の一致するところである。けれどもその経済書を評価する段になると、意見が分かれてくる。概して自由主義的傾向の持ち主は、自分たちの信をおく思想の展開と普及とに同書は少なからず貢献したとってその書に高い評価を与えた。そうした評価に基づいて、たとえばロシアの皇帝アレクサンドル1世 (Aleksandr I) は、早くも1804年に『商業的富について』の著者にたいしてヴィルナ帝国大学の経済学の講座を提供することにしたのであろう⁴⁰⁾。そのロシア皇帝からのせっきくの申し出を断って「ヨーロッパ大陸の中央に位置する自由主義精神の砦」⁴¹⁾ジュネーヴにとどまった彼がやがて「正統的な」と形容することになるところのイギリスの「純粹」に自由主義的な経済学者たちの場合には、いまの著作をシスモンディの最良の書と持ちあげさえした⁴²⁾。彼らにしてみれば、「個々の利益〔は〕……それらが統制を受けなければ容易に全体の福祉に向かうようになる」⁴³⁾といった論調で貫かれたこの著作ほど、自分たちの信奉する思想をシスモンディが率直に受け入れ、かつ明快に再定式化したことを示すものはないように思われたに相違ない⁴⁴⁾。それだけにまた、同じ著作にかんして、内容の面においては独創

39) J. C. L. Simonde [de Sismondi], *De la richesse commerciale, ou principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce*, Genève : J. J. Paschoud, 1803, 2 tomes.

40) Cf. Courtois, *op. cit.*, pp. 14-5; Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, pp. 44-5.

41) Salis, *ibid.*, p. 74.

42) この点については、さしあたりつぎの文献に依拠した。Salis, *ibid.*, p. 72.

43) Simonde [de Sismondi], *De la richesse commerciale...*, t. II, p. 144.

44) 『商業的富について』にかんしてイギリスの古典派経済学者たちが抱いたであろうこ

性が欠けていると評する向きも少なくなかった。たとえば先のアフタリオンは、「通俗書『商業的富について』には付随的な面白味しか感じられない」といつてのけた⁴⁵⁾。ある程度まではこうした感想を抱く読者が現われるかもしれないということは、著者のほうでもすでに織り込み済みであった。彼は、同書の「まえがき」の中でつぎのように述べていた。すなわち、「この学問〔経済学〕をすでに知っている人や、しかるべき原典にまで遡って研究したことがある人の場合には、〔本書の〕最初の3章を読んでいやになってしまうのではないかと私は恐れる。なぜならそれらの章には、アダム・スミス (Adam Smith) を十分に研究した人にとってはことさら新しい考えはほとんどなにも含まれていないからである」⁴⁶⁾、と。だがしかし、この書の著者によるスミスの経済学説の祖述は、本当に同書の「最初の3章」のみにとどめられたのであろうか。いいかえれば、同書の第1編第4章以降には本当にシスモンディ独自の「新しい考え」が含まれているのであろうか。読者のほうでは必ずしもそのようには受けとらなかつた。だからこそ、その同じ書物をめぐっていま先のように評価が分かれることになったのであろう。いずれにせよ同書はイギリスやロシアにおいてさえも、翻訳に値するほどのものではないと値踏みされるにとどまった⁴⁷⁾。

のような感想を理路整然と代弁したものが、つぎの文献なのである。Courtois, *op. cit.*

45) Aftalion, *op. cit.*, p. 25.

46) Simonde [de Sismondi], *De la richesse commerciale...*, t. I, p. xx.

47) つぎの文献によれば、『商業的富について』には1837年にパリで刊行された第2版と1811年にウィーンで刊行されたドイツ語翻訳版とがあるということである。Walter Braeuer, *Handbuch zur Geschichte der Volkswirtschaftslehre: Ein bibliographisches Nachschlagewerk*, Frankfurt am Main, o. D., S. 114. だがしかし、それは何かの間違いであろう。シスモンディの当面の著作が一度も改版の機会に恵まれなかつたことについては、つぎの文献に述べられておりである。Courtois, *op. cit.*, p. 4. また、ドイツ語翻訳版のほうについては、確かに、‘D. zwei Systeme d. pol. Ök., Wien 1811’ といった具合にそのタイトルまで明記している文献 (Wolfgang Heller, *Nationalökonomie: Theorie und Geschichte*, 3. stark verm. Aufl., Halberstadt, 1930, S. 246) もないわけではない。けれども1811年にウィーンで刊行されたそのタイトルの書物は、実際には『商業的富について』のではなくしてシスモ

『商業的富について』に物足りなさを感じた向きには、1819年にパリで刊行された『経済学新原理』全2巻⁴⁸⁾のほうがシスモンディの代表的な経済書とよぶにふさわしい著作であるように思われた。その『経済学新原理』の「はしがき」には、同書の成立までの経緯がシスモンディ自身によってつぎのように説明されている。すなわち、「本書は……〔1818年刊の〕『エディンバラ百科事典』に私が寄稿した論説『経済学』を、さらに発展させたものであると考えてよい。……『商業的富〔について〕』を書いてから15年余りの間、私は経済学の本をほとんど読まなかったが、しかし事実を研究することはやめなかった。その中には、私が採用していた原理に反するようにみえる事実も幾つかあった。豁然として私には、それらの事実は私が自分の理論に新たな展開を与えることで相互にまとまりが付き、かつ説明しあうものとなるように思われた。私は、先へ進めば進むほど、アダム・スミスの体系に修正を加えることの重要性と妥当性をますます確信するに至った。……けれども『百科事典』のための小論においては、新しい見解と思われるものはいっさい軽く触れるのみにとどめておいた。……だから私は、とくにその小論で軽く触れたにすぎなかったことを詳しく展開するために、あるいはまたおすおすたと述べたにすぎなかったことをできるだけしっかりとした基礎のうえに据えるために、同じ概論をもう一度書いたほうがよいと考えたのである⁴⁹⁾、と。こうして『経済学新原理』が生みだ

ンディが1805年頃に執筆したとみられる論説（この執筆時期は、吉田静一『フランス古典経済学研究——シモンド・ド・シスモンディの経済学』有斐閣、1982年、232、236ページによれば「1804年頃」ということである）のドイツ語翻訳版なのである。しかも、それと同じ年に同じ場所で彼の別の労作のドイツ語翻訳版が刊行されていたということについては確かな証拠がない。したがって『商業的富について』には、原典初版以外のいかなる版も存在しないのではなかろうかと考えざるをえない。

48) J. -C. -L. Simonde de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, Paris: Delaunay et Treuttel et Wurtz [sic], 1819, 2 tomes.

49) *Ibid.*, t. I, pp. [i]-iv. 菅間正朔訳『経済学新原理(上)』日本評論社、1949年、27-9ページ；吉田静一訳「シスモンディ『経済学新原理』(一)」, 神奈川大学『商経論叢』

されたのだとすれば、それまでの約16年の間、シスモンディはまさしく『商業的富について』の中で彼自身が提示した方法論にみずから忠実にしたがっていたということになる。『商業的富について』において、彼はたとえば、「細々としたことの観察によって大綱を確かめ、その学問〔経済学〕を日々の実際にたえず近づけてゆかなければならない」と述べていた⁵⁰⁾。そのような方法論に基づいて、彼は、「事実」の「研究」をおし進め、その「事実」に照らして、ほかならぬ『商業的富について』の理論に「新たな展開を与え」たり「修正を加え」たりしようと試みたのであろう。そしてその種の試みの中で最も詳細かつ体系的なものが、『経済学新原理』であったというわけなのである。しかもこの新著の内容は、その後のシスモンディによっていっそう精緻化ないし敷衍されることはあっても大幅に再修正されるというようなことはなかった。とすれば、やはり『経済学新原理』は、彼の代表的な経済書であったといって差し支えないであろう。

その『経済学新原理』も、シスモンディの存命中にはあまり大きな影響力をもつことはできなかった⁵¹⁾。この点は、『商業的富について』の理論が定式化されてから『経済学新原理』が成立するまでの間に刊行された前掲の彼の歴史家としてのデビュー作『中世イタリアの諸共和国の歴史』全16巻の場合とは対照的であった。その歴史書の場合には何度も版を改められた⁵²⁾のに、『経済学

第11巻第3・4号、1976年3月、53-5ページ。ただし、後者の訳のテキストとして用いられているのは、後注63に掲げる『経済学新原理』第3版である。また、訳文は多かれ少なかれ変更した。

50) Simonde [de Sismondi], *De la richesse commerciale...*, t. I, p. xv.

51) 『経済学新原理』の初版と第2版とにたいする当時の書評にかんしては、さしあたり、吉田氏の前掲書の245-77ページを参照されたい。

52) 前注11に掲げた『中世イタリアの諸共和国の歴史』の版は、シスモンディの存命中にさらに4度も改訂を加えられた。すなわち、J. C. L. Simonde de Sismondi, *Histoire des républiques italiennes du moyen âge*, nouvelle édition, revue et corrigée, Paris: Treuttel et Würtz, 1826, 16 tomes; Simonde de Sismondi, *ibid.*, 4^e édition, Bruxelles: Aug. Wahlen, 1826, 12 tomes; *ibid.*, 5^e édition,

新原理』のほうはシスモンディ自身によってはたったの一度しか改版されなかった⁵³⁾。それまでの「経済学の公認の原理」では説明のつかない諸現象の発生に伴う『経済学新原理』初版の売れ行きが増大あるいは在庫の減少に、わけでも1825年のイギリスでの恐慌（のちに第1回目の周期的過剰生産恐慌と認定されることになる恐慌）の勃発に伴うこの著作への需要の高まりに鑑みて1827年に刊行されることになったその第2版の「はしがき」には、つぎのような一文もみいだされる。すなわち、「本書は、こんにち正当にも経済学にこのうえなくめざましい進歩をもたらしたとみなされている人々からはまったく賞賛を得ることができなかった」⁵⁴⁾、と。この一文からも推察されるように、『経済学新原理』は、先の歴史書とは違ってわずかに2つの巻から成っているにすぎないのに、シスモンディの存命中には、当該分野にかんするかぎりそれほど先進的であったとも思われない2つの地域の言語に翻訳されたただけであった。同書のイタリア語翻訳版は原典の初版の発行と同じ年、つまり1819年に⁵⁵⁾、またスペイン語翻訳版のほうはサリスによれば1834年に⁵⁶⁾、それぞれ刊行された。当時の経済学の最先進国イギリスにおいては、この著作を翻訳したり賞賛したりする

Bruxelles: Société Typographique Belge, Ad. Wahlen et Companie, t. I-V: 1838, t. VI-VIII: 1839; J. C. L. Simonde de Sismondi, *ibid.*, nouvelle édition, Paris: Furne et C^e, Treuttel et Wurtz, 1840, 10 tomes, と。

53) J. -C. -L. Simonde de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, seconde édition, Paris: Delaunay, 1827, 2 tomes.

54) *Ibid.*, t. I, p. [1]. 菅間訳, 357ページ; 吉田訳, 46ページ。ただし、訳文は変更した。

55) Sismondo de' Sismondi [sic], *Nuovi principj di economia politica, o sia della ricchezza posta in raffronto colla popolazione* [sic], tradotti dal Gaetano Barbieri, Milano: Rodolfo Vismara, 1819, 3 vol.

56) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Nuevos principios de economia politica, o de la riqueza en sus relaciones con la poblacion*, trad. por D. Francisco Terez y Borona, Granada: Benavides, 1834, 2 vol., cités par Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, p. 66.

気配はまったくみられなかった。そこでは、スミスの体系を純化徹底させたといわれるリカードゥ(David Ricardo)の主著『経済学と課税の原理』が1817年に公刊されたばかりであった。1820年にシスモンディが報じたところによれば、「リカードゥ氏は、自分の著作〔『経済学と課税の原理』〕を理解してくれたであろうと思われる人物はイギリスでは25名しかいないと自ら告白したらしい。恐らくは彼が難解さを表明したことから、その著作を理解した人々、あるいは理解したと思った人々は、ただそれだけで自分を門弟とみなす結果になったのであろう」⁵⁷⁾ということであるけれども、まさにそのような意味での「リカードゥの門弟の1人」とシスモンディによって称されることになった人物が、早くも1819年のうちに『経済学新原理』をとりあげ、その内容のほんの一部分のみに反論を加えて同国におけるこの著作の評価に先例を開いたのであった⁵⁸⁾。それから2年後の1821年に同じ著作を「論駁」したと自称するもう1人の「門弟」マカロック(John Ramsay McCulloch)の場合には、イギリスの経済が何度か恐慌を経験したあとの1845年に至ってもなお、シスモンディの業績を寸評しながら、「他の〔歴史関係の〕著作でもなければここに言及されているもの〔当面の『経済学新原理』と後述する『経済学研究』〕はすっかり忘れ去られたこ

57) I. C. L. de Sismondi, Examen de cette question : Le pouvoir de consommer s'accroît-il toujours dans la société, avec le pouvoir de produire? *Annales de législation et de jurisprudence*, t. I, Genève: Manget et Cherbuliez, 1820, p. 112. 斎藤佳倍訳「シスモンディ『生産と消費の均衡について——トレンズへの批判』(上)」, 弘前大学『文経論叢』第4巻第5号, 経済学篇VI, 1969年2月, 123ページ。ただし、この邦訳のテキストとして用いられているのは後注63に掲げる『経済学新原理』第3版の付録の部分である。また、訳文は変更した。

58) [Robert Torrens,] Mr Owen's Plans for Relieving the National Distress, *The Edinburgh Review*, vol. XXXII, no. LXIV, October 1819. ちなみに、この論文の執筆署名は、つぎの文献によれば、マカロックであるということである。Salis, *Sismondi, 1773-1842, la vie et l'œuvre...*, p. 401, n. 3, et p. 422. だがそれは誤解であろう。また、同じ論文の中での批判に依ってシスモンディが執筆した論文こそ、上注に掲げた文献なのである。

とであろう」と公言して憚らなかった⁵⁹⁾。マカロックにしてみれば、上掲の2つの翻訳版が日の目をみたのもそれに先だって『中世イタリアの諸共和国の歴史』がヨーロッパ中に好評を博していたからこそそのことであったに相違ない。

ちなみに、シスモンディの死後しばらくすると、その同じ『経済学新原理』がかえって息を吹き返したかのごとくに広範な読者をみいだすようになった。この点もまた、『中世イタリアの諸共和国の歴史』をはじめとする彼の歴史書の場合とは著しく対照的であった。シスモンディの歴史書の中で、彼の死後においてもなお新たな言語圏に読者をみいだすことができたといえるものがあるとすれば、それはいま引き合いにだした著作だけなのであるが、その著作でさえも非常に大幅な変容を蒙りながら今世紀のはじめに辛うじて英語圏の読者のみを追加的に獲得しえたにすぎなかった⁶⁰⁾。また、もっとも頻繁に新たな読者をみいだす機会に恵まれたものは、1832年に発刊された前掲の『イタリアの諸共和国の歴史——イタリアの自由の起源・進展・衰退についての概観』であったのであるが、その著作といえども直接にはもっぱら英語圏の読者のみを対象として増刷され改版されたにすぎなかったのであり、しかもその改版や増刷の

59) John R. McCulloch, *The Literature of Political Economy: A Classified Catalogue of Select Publications in the Different Departments of That Science with Historical, Critical, and Biographical Notes*, (1845), New York, 1964, p. 25. シスモンディの『経済学新原理』にたいする1821年当時のマカロックの批判は、つぎの文献において展開されている。[*Idem*,] *Effects of Machinery and Accumulation*, *The Edinburgh Review*, vol. XXXV, no. LXIX, March 1821. 相見志郎訳「マカロックの機械論」, 同志社大学『経済学論叢』第19巻第1号, 1970年3月。

60) 『中世イタリアの諸共和国の歴史』全16巻は、シスモンディの存命中にはついに英語には翻訳されなかった。それが英語でつぎのように「改作」されたのは、1906年のことであったと推定されている。すなわち, J. C. L. Sismondi, *History of the Italian Republics in the Middle Ages*, entirely recast and supplemented in the light of subsequent historical research, with a memoir of the author by William Boultong, London: George Routledge & Sons, [1906], と。

頻度は現在に近づきにつれて次第に低下してきているのである⁶¹⁾。さらに、彼の歴史書とさまざまな言語によるその翻訳版との全体の中で、現在にもっとも近い時点において新たな読者をみい出す機会を与えられたものは、前掲『フランス人の歴史』の第1～3巻の英語抄訳版なのであるが、1850年発刊のその版ととも1世紀余りの永きにわたって世に埋もれ続けたあとの1976年に、わず

61) 筆者が直接その現物にあたってみたりフォト・コピーをとりよせて調べてみたりしたかぎりにおいては、前注15に掲げた英語による著作——それは、xxix, 378ページから成っている——は、当初の版のままでも少なくとも1度は増刷され (*A History of the Italian Republics, Being a View of the Origin, Progress and Fall of Italian Freedom*, London: Longman, Brown, Green & Longmans [n. d. 17cm, in 8s. One volume of *The Cabinet Cyclopaedia* conducted by Dionysius Lardner.]), 発行者の手によって4度は改版された。その4度のうちの1度については時期を特定することが容易ではない (*Ibid.* [which means “the same title as above” in this footnote], London: Longmans, Green, and Co. [n. d., xxix, 378p. 17cm, in 8s. An independent volume.]). だが1894年に「新しい版」が発行されたということのはっきりしている (*Ibid.* New edition. London and New York: Longmans, Green, and Co., 1894. [xxix, 378p. 17cm, in 8s. Virtually the same independent volume as above except for the edition’s imprint.]). その版、もしくはこれの別版は、1901年と1906年に増刷された (*Ibid.* New impression. London, New York and Bombay: Longmans, Green, and Co., 1901; 1906 [20cm, 12°]). また、1907年にはさらに新たな版が発行された (*A History of the Italian Republics, Being a View of the Origin, Progress & Fall of Italian Freedom*. London: J. M. Dent & Co., and New York: E. P. Dutton & Co., [1907. x, 338p. 17½cm, 12°. No. 250 of *Everyman’s Library* edited by Ernest Rhys. Without ‘Author’s Preface’ and ‘Analytical and Chronological Table’. With ‘Editor’s Introduction’ and revised ‘Index’]). その版は1910年, 1917年, 1926年, そして1931年に増刷された ([The 1910 impression not yet identified;] *Ibid.* London and Toronto: J. M. Dent & Sons, Ltd., and New York: E. P. Dutton & Co., [1917]; [1926]; [1931]). 1931年にはその別版も発行されている (*A History of the Italian Republics*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., and New York: E. P. Dutton & Co. Inc., [1931. With a survey of five lines of Sismondi’s career added.]). 最後に改版が行われたのは1966年のことであった。その年に発行された版 (*A History of the Italian Republics, Being a View of the Origin, Progress and Fall of Italian Freedom*. Introduction by Wallace K. Ferguson. Garden City, N. Y.:

Anchor Books, [1966. lxii, 373 p. An independent volume. With 'Author's Preface' restored, 'Analytical and Chronological Table' abridged, and 'Index' completely revised.]) は、1970年に増刷されることになった (*Ibid.* Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1970)。爾後の増刷ないし改版については、まだ1件もそれを確認しえていない。

ところで1832年にイギリスのロンドンで発刊されたこの著作は、すでに本文中にも述べたように、副題の部分的変更を蒙りながらアメリカのフィラデルフィアでも同時に出版されていた。前注17に掲げたそのいわばアメリカ版——それは、xxii, (23)-300ページから成っており、ハーフ・タイトル・ページの記載事項はロンドン版のそれとほとんど同じである——の場合には、早くも1835年に「新版」が発行されることになった (*A History of the Italian Republics: Being a View of the Rise, Progress, and Fall of Italian Freedom. A new edition. Philadelphia: Carey, Lea, & Blanchard, 1835. [xxii, (23)-300p. The half title not yet identified.])*。それから5年後の1840年には、今度はニューヨークの出版者から別版がだされた (*Ibid.* A new edition. New York: Harper & Brothers, 1840. [xxii, (23)-300 p. An independent volume.])。その版は1847年, 1855年, 1858年, 1875年, 1888年——この最後の発行年は恐らくはヴァージニア大学の図書館によって当該図書の表題紙に書き込まれたもの——に増刷された (*Ibid.* A new edition. New-York: Harper & Brothers, 1847; *Ibid.* A new edition. New York: Harper & Brothers, 1855; 1858; 1875; [1888])。また、1901年頃——この日付については本注末尾に掲げる文献の117ページに依拠した——には同じニューヨークの別の出版者によっても版数が重ねられた (*Ibid.* A new edition. New York: The Bradley Company, [1901? xxii, (23)-300p.])。だがしかし、それを最後にアメリカ版の発行はぱったり途絶えてしまったようである。

ちなみに、当面の著作は1841年にはフランスのパリのほうでも若干異なった標題のもとに出版されていた (*Italian Republics: or the Origin, Progress, and Fall of Italian Freedom. A new edition. Paris: A. and W. Galignani and C^o., 1841. [xxiv, 280p. An independent volume. With 'Index' revised to the negligible extent.])*。そのパリ版とでもいうべきものは同じ1841年のうちに増刷された (*Ibid.* A new edition. Paris: A. and W. Galignani and C^o., and Florence: Joseph Molini, 1841)。けれどもさらに版を重ねるといようなことはなかったらしい。

最後に、この著作については筆者未見の別版本や異刷本も何点かあることであろう。少なくともつぎのカタログによれば、そのようなものが5点はあるようである (*Ibid.* New edition. London: Longman, Orme, Brown, Green, & Longman, and J. Taylor, 1838. xxix, 378p. *The Cabinet Cyclopaedia*, conducted by D. Lardner. On spine: *Lardner's Cyclopaedia*, 17: *A History of the Italian Republics*,

かに一度だけ復刻されたにすぎなかった⁶²⁾。それにたいしてシスモンディの代表的な經濟書である『經濟学新原理』のほうは、1951~53年に「第3版」の刊行をみた⁶³⁾うえに、1971~76年にさらにもう一度版を重ねている⁶⁴⁾。このこと

Being a View of the Origin, Progress and Fall of Italian Freedom. London: Longman, Brown, Green, & Longmans, [1832]. xxix, 378p. 17cm. On cover: *Lardner's Cabinet Cyclopaedia*, 14; *Ibid.* New impression. London, New York: Harper & Brothers, 1899. 300p. 17½cm; *A History of the Italian Republics: Being a View of the Rise, Progress and Fall of Italian Freedom*. A new edition. New York: Harper & Bros., 1843. xxii, [23]-300p. 17cm; *Ibid.* A new edition. New York: Harper & Brothers, 1864. xxii, 23-300p. 17cm). *The National Union Catalog, Pre-1956 Imprints*, vol. 547, [London and Chicago,] 1978, pp. 116-17. 確かにこのカタログに記載されている書誌的データの中には正確さに欠けるものもないわけではない。しかしながら、いま表記法に若干の変更を加えながら引用したばかりのデータにかんするかぎり、筆者にはとやかくいう資格がないのでさしあたりそれに依拠することにする。とすれば、問題の5点の出版物はそのいずれもが前世紀の間に発行されたものであるということになる。

- 62) J. C. L. Simonde de Sismondi, *The French under the Merovingians and the Carolingians*, New York: AMS Press, 1976. [Reprint of *The French under the Merovingians* and *The French under the Carolingians*, both translated by William Bellingham, and published separately in 1850 by W. & T. Piper, London]. ちなみに『フランス人の歴史』の英語抄訳版は、このほかにも4点ほどあるのであって、それらの中でもっとも早い日付を有するものが、前注31の最後に掲げた文献なのである。
- 63) J. -C. -L. Simonde de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population*, 3^e édition, Genève et Paris: Edition Jeheber, t. I [avec une préface par G. Sotiroff]: 1951 et t. II [avec un post-scriptum par G. S.]: 1953.
- 64) J. -C. -L. Sismonde de Sismondi [*sic*, *ibid.*, [t. I avec une] préface de Jean Weiller avec la collaboration de Guy Dupuigrenet-Desroussilles, [Paris:] Calmann-Lévy, [1971]; J. -Ch. L. Simonde de Sismondi, *Nouveaux principes d'économie politique*, [t. II :] *les trois livres du second tome, du numéraire, de l'impôt, de la population*, texte intégral de la seconde édition (1827), [avec un] avant-propos de Jean Weiller et G. Desroussilles, [*Économies et sociétés*, HS 20, t. X, n^o 1, Paris:] Institut de sciences mathématiques et économiques appliquées, [janvier 1976].

から、当該著作の改版の頻度は現在に近づくにつれて高まってきているといったとしたなら、それはこじつけになるであろうか。少なくとも同書の新たな翻訳版の刊行の頻度は、彼の死後、ときが経つにつれて明らかに高まってきている。その翻訳版についていえば、彼の生前には上述のように1819年と1834年とにそれぞれイタリア語によるものとスペイン語によるものとがだされたただけであった。けれども彼の死後においては、たとえば1854年にイタリア語新訳版⁶⁵⁾、1897年にロシア語抄訳版⁶⁶⁾、1901～2年にドイツ語初訳版⁶⁷⁾、1936年に原典第1巻のみのロシア語翻訳版⁶⁸⁾、1942年に同様に原典第1巻のみの日本語初訳版⁶⁹⁾、1948年に同第2篇までの日本語改訳版⁷⁰⁾、1949～50年に日本語全訳版⁷¹⁾、1955年にポーランド語初訳版⁷²⁾、1971～75年にドイツ語新訳版⁷³⁾、1975

65) Sismondo de Sismondi [*sic*], *Nuovi principii d'economia politica, o della ricchezza nei suoi rapporti colla popolazione*, in *G. B. Say, Trattato d'economia politica; De Sismondi, Nuovi principii d'economia politica; Destutt de Tracy, Trattato della volontà; Gius. Droz, Economia politica*, vol. VI della prima serie della *Biblioteca dell'economista*, [introduzione del Fr. Ferrara,] Torino: Cugini Pomba e Comp., 1854, pp. [541]-798.

66) Ж. Симондь де-Сисмонди, *Новыя начала политической экономіи* [*sic*], переводъ Б. О. Эфрусси, издание [*sic*] К. Т. Солдатенкова, Москва: А. И. Мамонтова, 1897.

67) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Neue Grundsätze der politischen Ökonomie, oder der Reichtum in seinen Beziehungen zu der Bevölkerung*, nach der zweiten Ausgabe von 1827, übertragen von Robert Prager, Berlin: R. L. Prager, Bd. I: 1901 u. Bd. II: 1902.

68) Ж. Симонд де Сисмонди, *Новые начала политической экономии, или о богатстве в его отношении к народонаселению*, перевод под редакцией А. Ф. Кона, Москва: Государственное Социально Экономическое Издательство, 1936.

69) シスモンディ『政治経済学新原理』山口茂・菅間正朔訳、慶應書房、1942年。

70) シスモンディ『政治経済学新原理』上巻ノ一、菅間正朔訳、岩崎書店、1948年。

71) シスモンディ『経済学新原理』菅間正朔訳、世界古典文庫、日本評論社、(上)1949年、(下)1950年。

72) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Nowe zasady ekonomii politycznej, czyli o bo-*

年にもう1つ別のイタリア語新訳版⁷⁴⁾、1976~83年に原典第4篇第12章タイトルまでの日本語新訳版⁷⁵⁾、その間の1977年に中国語初訳版⁷⁶⁾、そして1991年に英語初訳版⁷⁷⁾が刊行されている。このことからさらに、当面の著作はシスモンディの死後においてもなお、というよりむしろ彼の死後においてはじめて多くの言語に翻訳され、それらの言語圏にいよいよ広範な読者を獲得しうようになったということができるであろう。

とすればそれはなぜなのか。『経済学新原理』はシスモンディの死後どのような経緯で世界各地に広範な読者を獲得しうに至ったのか。こういった疑問が生じてくるかもしれない。だが、その疑問にたいしては本稿では詳しく答えるわけにはゆかない。とりあえずつぎのことを記すのみにとどめておく。すなわち、この著作が現れた頃のイギリスで確立された資本主義はシスモンディの死後、地球上のいよいよ広い範囲に普及し浸透していった。それに伴って資本主義の内的矛盾もいっそう激化していった。その矛盾は、恐慌という形で現象

gactwie i jego stosunku do ludności, [Kraków:] Państwowe Wydawnictwo Naukowe, 1955, 2 t.

73) *Idem, Neue Grundsätze der politischen Ökonomie, oder vom Reichtum in seinen Beziehungen zur Bevölkerung*, eingeleitet und herausgegeben von Achim Toepel, Berlin: Akademie-Verlag, Bd. I: 1971 u. Bd. II: 1975.

74) Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, *Nuovi principi di economia politica, o della ricchezza nei suoi rapporti con la popolazione*, a cura di Piero Barucci, [Milano:] ISEDI, [1975].

75) 吉田静一訳「シスモンディ『経済学新原理』(1)~(5)、神奈川大学『商経論叢』、第11巻第3・4号、1976年3月；第12巻第1号、1976年7月；第12巻第2号、1976年10月；第12巻第3号、1977年1月；第12巻第4号、1977年2月。同(6)、東京経済大学『東京経大会誌』第130号、1983年3月。

76) 西斯蒙第『政治经济学新原理 或 论财富同人口的关系』何钦译，北京：南务印书馆，1977年。

77) J.-C.-L. Simonde de Sismondi, *New Principles of Political Economy: Of Wealth in Its Relation to Population*, translated and annotated by Richard Hyse, with a Foreword by Robert L. Heilbroner, New Brunswick and London: Transaction, [1991].

してはこれによって暴力的に解決されてきた。とりわけ1873年の恐慌、1929年からの世界大恐慌、1974～75年のいわゆる世界同時リセッションによっては矛盾の運動形態が相当に寛容させられたことから、資本主義はそれらの危機的現象を機縁につきつぎと新しい段階に移行してきたともいわれている。しかしながら、どの段階の資本主義であれ、またどの地域の資本主義であれ、そこには厳然として矛盾が内在している。このことを、資本主義の普及・浸透につれてますます広範な人々が実感ないし認識するようになってきた。しかも彼らの中には、『経済学新原理』を著したシスモンディこそ直接には自由競争段階のイギリスの資本主義を研究の対象としながらいち早くその内的矛盾を認知し、その矛盾の「非人間的」な現象諸形態に対処する諸方策に思いをめぐらせた最初の経済学者の1人であったということを想起する向きが少なくなかった。わけてもマルクス（Karl Heinrich Marx）の場合には、彼自身の「経済学批判」の一環としてシスモンディの経済学関係の諸業績を比較的まともにとりあげさえした⁷⁸⁾。その成果を盛り込んだマルクスの諸著作は、世界中の広範な人々に親しまれ、もって彼らの間に経済学者としてのシスモンディの功績や彼の代表的な著作である『経済学新原理』の名を広めることにも少なからず貢献することになった、と。

ところで、経済学者としてのシスモンディにはもう1つ重要な作品があった。それは、1837～38年に『社会科学研究』の第2巻、第3巻として刊行された『経済学研究』全2巻⁷⁹⁾であった。シスモンディは、先の『経済学新原理』初版の上梓後、3年越しの恋が実を結んだことも重なってか新たな気分で『フ

78) マルクスのシスモンディ論については、さしあたりつぎの文献を参照されたい。吉原泰助「経済学批判体系の形成とシモンドウ・ドウ・シスモンディ」、経済学史学会編『「資本論」の成立』岩波書店、1967年、所収。

79) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Études sur l'économie politique*, tome second et tome troisième de ses *Études sur les sciences sociales*, Paris: Treuttel et Würtz, et Bruxelles: Société Typographique Belge, Ad. Wahlen et C^e., t. I: 1837, et t. II: 1838.

ランス人の歴史』のための著作活動にのりだした。そうしてその著作の第20巻の版行にまでこぎつけたところで、今後は同書の続巻と並行させて新たに全集をも刊行してゆくことにしようと考え、それまで15年にわたって一貫して当面の歴史大作の刊行に携わってきたパリの出版者にかけてあうために、全集のプランをかなり詳しく書き送ることにした⁸⁰⁾。その全集はついにでなかったのであるが、しかしプランの一部分だけは大幅な変更を蒙りながらも独立した論文集という形で実現されることになった。それが1836～38年刊の『社会科学研究』全3巻であったのであり、そしてその論文集の第2巻と第3巻をなすものが『経済学研究』であったのである。

この『経済学研究』には、「まえがき」と「序文」を別とすれば17編の論文が収録されている。そのうち、純粋に初出といえるものは5～6編程度であって残りはすべて既発表の論文に多かれ少なかれ手を加えたものなのではなかろうかと思われる。『経済学新原理』の初版を世に送りだしたあとのシスモンディは、先のように『フランス人の歴史』のための著作活動に従事したとはいっても決してそれに専念していたわけではなかった。彼は、歴史家としていま先の活動に従事すると同時に、彼自身の言葉をかりれば「富のではなくして人間の経済学者」⁸¹⁾として「諸事実」を研究し、その成果を論文にまとめて幾つかの雑誌に発表してもいたのである。上述のパリの出版者との交渉を終えたシスモンディは、それらの論文の中でもとくに1821年から1836年までの間に発表された11～2編のものに手を加え、さらに数編の未発表論文をも追加してこの『経済学研究』を形成したのであろう。

当該論文集の内容は、全体としてみれば『経済学新原理』のそれをいっそう

80) Cf. Lettre de Sismondi à Treuttel et Wurtz, 16 mai 1835, dans G. C. L. Sismondi, *Epistolario raccolto*, a cura di Carlo Pellegrini, Firenze, vol. III [: 1936], pp. 280-81. この手紙の中の全集プランの部分は、つとにつぎの文献に再現されていた。Salis, *Sismondi, 1773-1842, lettres et documents inédits...*, pp. 67-8.

81) Sismondi, *Études sur l'économie politique*, t. I, p. 191.

精緻化ないし展開させたものであるとあってよいかもしれない。この論文集『経済学研究』には、前著と比べてまったく新しいと思われるような考え方はなにひとつ述べられていないのではなかろうか。また、前著の中でとり扱われなかった問題はなにひとつ提起されていないのではなかろうかと思われる。と同時に、前著の中で提起されていた問題がここでは一段と細やかな配慮をもってとり扱われ、その際にはまたつぎのような考え方がより鮮明にうちだされていると評価してもよいであろう。すなわち、「われわれが社会のさまざまな状態を研究しようとするのは、それぞれの状態における社会の幸福を、ただたんに肉体的欲求の充足という観点からばかりでなく、人間の好みや性向という観点、あるいは日常生活から生ずる知的・道徳的發展という観点からも見定めるためなのである」⁸²⁾といった考え方がである。

それにもかかわらず、否それだけにというべきであろうか、いずれにせよ『経済学研究』は、当該分野の学者の間ではあまり好評を博さなかった。この論文集は、シスモンディの存命中には、『経済学新原理』にたいする前述のような評価を前提すればあながち予想しがたいことではないのであるが、わずかにイタリア語に翻訳されただけであった⁸³⁾。イタリア語は、『経済学新原理』

82) *Ibid.*, t. I, p. 46.

83) 『経済学研究』のイタリア語訳には、抄訳版と全訳版とがある。抄訳版には、多かれ少なかれ異なる内容のものが、少なくとも5点はある。それらの標題紙には、まったく同じ著者名、書名、訳者名、出版地名、印刷者名が記載されている。すなわち、I. C. L. Simondo de Sismondi [sic], *Due saggi degli studj sulla economia politica* [sic], tradotti dal dottor Leonardo Orioli, Ravenna: Roveri, と。同じ標題紙にみられる出版年によれば、それら5点のうちの2点は1838年に、また別の2点は1839年に、そして残りの1点は1840年に、それぞれ刊行された。1838年刊行の2点のうちの1点は、原典第2巻の第12論文と第13論文を訳出したものである。もう1点は、原典第1巻の第4論文と第5論文を翻訳したものであり、こちらのほうは1839年に再版となった。1839年に発行された2点のうちの残りの1点は、原典第2巻の第14論文と第15論文を、そして1840年刊の最後の1点は、原典第1巻の第1論文と第2論文を、それぞれ訳出したものである。

これらの抄訳版とは違ってつぎに掲げる文献は、『経済学研究』の全訳版である。

がいち早くそれに翻訳されたところの言語であったばかりでなく、『経済学研究』の生成の地の言語でもあった。この論文集は1836～37年にペッサの地において形成されたのである。その1年後にシェーナに戻ったシスモンディは、もはや二度とペッサの土を踏むことなく一生を終えた。ちなみに、それからしばらく経って『経済学新原理』がようやく再評価されるようになったあとにおいても、『経済学研究』のほうは、1923年にその日本語による抄訳が『経済恐慌論』という翻訳選集の一篇を飾った程度⁸⁴⁾であって、長い間、日の目をみたとはいえない状態におかれてきた。ただし社会学者の中には、同じこの論文集を比較的高く買う向きもある。たとえばデュルケム(Émile Durkheim)の場合には、『経済学新原理』にはなしにむしろ『経済学研究』のほうに依拠してシスモンディの「学説」を「解説」している⁸⁵⁾。経済学者の間においても、たとえば「この学問〔経済学〕は社会的に結合した人間をつねに対象としているし、またつねにそうすべきでもある」⁸⁶⁾と述べ、かつまた「人間社会の目標は何なのであろうか」⁸⁷⁾と問うこの論文集の意義を、もっと積極的に認めう

G. C. L. Simondo de' Sismondi [sic], *Studi intorno all'economia politica*, Capolago: Tipografia e Libreria Elvetica, vol. I: 1839, e vol. II: 1840. それは、早くも1840年のうちに再版の運びとなった。Ibid., 1840, 2 parti.

84) シスモンド・ド・シスモンディ「国民経済学の研究 第1章 消費と生産との均衡」、高島素之・安倍浩訳『経済恐慌論』(『経済学体系』9) 而立社、1923年、第3篇。これは、シスモンディの『経済学研究』第1巻の第1論文を訳出したものである。なお、『経済学研究』の抄訳としてはこのほかに英語によるものもあるのであるが、それはつぎに掲げるように、『経済学新原理』の本格的な再評価が企てられる以前の時期に英語版シスモンディ選集の一部として世に問われていた。Sismondi, 'Introduction to Inquiries into Political Economy' and 'On Constitutional Monarchy', in *Political Economy, and the Philosophy of Government...*, 1847; Reprint 1966, respectively, pp. 123-50 and pp. 417-47.

85) Émile Durkheim, *Le socialisme, sa définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, édité par M. Mauss, Paris, 1928, livre I, chapitre IV. 森博訳『社会主義およびサン・シモン』恒星社厚生閣、1977年、第1編第4章。

86) Sismondi, *Études sur l'économie politique*, t. I, p. 3.

87) Ibid., t. I, p. 27.

る視点が尊重されてよいのではなかろうかと思われる。1980年に至ってようやく同書の復刻版が刊行された⁸⁸⁾のは、筆者と同じように考える向きが少しずつ増えてきていることの1つの現われなのであろうか。

（未完）

（本稿作成の過程においては、本学経済学部の重田晃一，橋本昭一，楠貞義，良永康平の各先生に教を仰いだ。それらの先生方は，ご多忙の身にもかかわらず懇切丁寧にご教示くださった。ここに記して感謝したい。と同時に，改めていうまでもないことではあるが，本稿にかんする責任はすべて筆者ひとりにあるということをも付け加えておく。）

88) J. C. L. Simonde de Sismondi, *Études sur l'économie politique*, [réimpression de l'édition de Bruxelles, 1837-38] avec une préface de Patrick de Laubier, Genève: Slatkine Reprints, 1980.